

「Over the “Empathy”」

人はどこまで相手とわかりあえるのか？家族でも友人でも恋人でも、どれだけ話し合っても、何十年と一緒にいても、いつの日か完全に相手のことがわかる時がやって来るのでしょうか？しかし、そんなメソッドがあれば世の中はもっと平和で暮らしやすく、人間関係で一喜一憂する人はいないはずです。これは人類が誕生してから今日に至るまで、あらゆるエポックを経ても課せられてきた人の宿命と言えるでしょう。

けれども、全てが予測できる何の弊害もない未来なんて歩む価値があるのでしょうか？人はわからないから知りたいと思い、興味があるから歩み寄るわけで、その中で形成される人間関係は人生における宝物です。だからこそ、人には共感する能力があります。

年齢も性別も国籍も違う相手と共感できる何かがある。そうわかった瞬間に孤独から解放されて、人とわかりあう価値を知ります。自分が見ている世界を伝えたい時、言葉は個人的かつ主観的になりがちで相手にうまく伝わらないことが多いのです。その葛藤があるからこそ、音楽、絵画、映画などの芸術的な文化が人類の歴史とともに発展してきたのではないのでしょうか。世界遺産で目にするような壁画や建造物を見ると、人は古来から人に何かを伝えたい、何かを残したい生き物だと実感します。なので、僕は人と何かをわかりあえることは、お互いの共感力なしには成り立たない最高のアートだと思います。

この町に来てから、色々な人と出会い、さまざまな家族のありかたを見てきました。そこには常に共感というキーワードがあって、自由気ままに生きてきた僕にとって学ぶことがあり、知らなかったことが多くあると気づきました。

田舎でのんびりマイペースに暮らそうと思っていたのに、常に周りに人がいる環境では社交的にならざるおえませんでした。しかし、器用な人間ではないので社交辞令的な付き合いは出来ません。常に「何でだ？どうしてだ？」と頭を抱えては誰にどう伝えていいのかもわからず、こんなことで苦悩しているなんて馬鹿らしいと思ったり、田舎だからとこじついたり、都会ではこんなことないと言ってみたりしました。でも、本心はそんなこと言いたくも、思いたくもなく、ただ共感してほしいだけだったのでしょう。

他人は変えられないけど、自分は変わることができる。そう確信してからは自分自身を俯瞰して捉えることが多くなりました。そんな心境で過ごした川西町での時間は、相手に寄り添うことを教えてもらった貴重な経験になりました。それは、自分にはない心の広さを持って、見守って味方になってくれた人たちがいたからです。人を思いやれるのは見返りを求めないからであり、人に優しくできるのは相手の気持ちがわかるから

であり、人に親切にできるのは自分がそうされない辛さを知っているからです。僕はこの町の人たちに多大な影響を受けて、自分の人間性をリメイクしてきたことになります。

僕の勝手な印象ですが、置賜の女性は都会の人にはない雰囲気があります。それが何か？は上手く表現できません。しかし、世の中は言葉で全てが伝わるわけではないので、それが、共感力(Empathy)だとすれば、かなり意味として近いかもしれません。

この町では祭りや集まりで食事の準備が必要とあれば女性陣が大活躍します。料理上手で毎日家族のために頑張っている主婦の方々が、見事なチームワークでテキパキと動くのを見て、毎回感心しました。そして、お祭りが終われば、片付けの最中に僕の夜ご飯に弁当なども作ってくれて、本当に親切な人たちです。

今回ご出演いただいた方も、実は以前からかわりがあって、交流センター（公民館）に行くとお茶を出してくれたり、一緒にご当地ソングを制作したり、畑の野菜をもらったり、販売している漬物づくりを見せてもらったり、色々な思い出があります。そして、この東沢という土地で姉妹で暮らしてきた方の言葉は、その言葉が持つ意味以上のことを感じました。

人はどこまでも相手とわかりあえないかもしれない、人生も思ったようにいかないかもしれない、それでも歩み寄って共感しようとするのは、家族、友人、恋人という強い絆で結ばれた大切な人だからです。そうして得られたことは、明日を生きる糧となり、輝かしい宝物として心に刻まれ続けるでしょう。お話を聞いた後、写真を撮ろうと外に出て、雨上がりの空を見上げ、澄んだ空気を深く吸い込みました。ファインダーには僕の心に何かを刻むように、宝物のように輝く虹が写っていました。

2021年12月9日 塗貴旭

